

# 猿投窯における生産構造

浅田 員 由

## はじめに

猿投窯は、一般にいう遺跡の範囲を越えた拡がりをもつ古窯跡として認識されている。これは、猿投窯が、従来の単なる須恵器生産が発展した生産地ではなく、より新しい窯業生産の構造を示すものとしてとらえられているからに他ならない。つまり、元来、自給自足的であり、せいぜい貢納生産でしかなかった須恵器生産が、商業的ないしは商品生産への窯業へと変化したことを意味している。このことは、猿投窯の実質的後継者となる瀬戸窯に即してみれば一層明解である。瀬戸窯は、中世の窯業において唯一、付加価値を有する窯業生産品であった。少なくとも瀬戸産の陶器は、容器や食器としての用途以上に評価されて流通していた。この、本来製品が有する実用的な側面とは別の面での評価が、流通を容易にし、その生産を発展させるのである。

猿投窯は、尾張国最初期の5世紀後半の須恵器生産に始まり、14世紀に幕を閉じるまで、約900年にわたり生産が続けている。また、その地域は、尾張・三河の両国にまたがっている。しかも灰釉陶器・緑釉陶器という、その時代の最高水準の陶器を生産するという多様な構造をもった窯業生産地である。こうした猿投窯を、一律的な生産遺跡としてとらえることは困難であり、妥当ではない。このため、従来からも、古窯跡分布の地域区分や須恵器・瓷器等の時間的区分がなされてきた。しかし、こうした区分は、生産構造を基本とした区分ではなく、ややもすれば機械的、一律的な区分といえる。そのため、従来の猿投窯の研究においては、生産の主体（たとえていえば経営者とでもいうべき存在）が明らかでなく、また、各地域における窯業の格差もはっきりしていない。これらのことをふまえて、猿投窯の生産構造について述べてみようとするものである。

## 1. 生産の時間的区分

猿投窯は、きわめて長時間にわたり生産が続けられた生産地で、歴史的な時代区分においても、古墳時代、飛鳥時代、藤原時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代を通して生産している。また、その生産品も、須恵器・灰釉陶器（緑釉陶器を含む）、山茶碗と大きく変化している。勿論、これらの製品が、一時期に一斉に変化をするものではなく、灰釉陶器が生産される段階においても、須恵器がかなり大量に生産されている事実もあり、これらの変化は、単に製品の差異ではなく、生産構造の変化とみるべきであろう。こうしたことを考慮したうえで、猿投窯を次の3期に区分してみよう。

第Ⅰ期 貢納生産 - 部民生産

第Ⅱ期 商業的生産 - 荘園生産

第Ⅲ期 商品生産 - 領主生産

第Ⅰ期は須恵器を中心としており、従来の見解でいわれるとおりでである。この生産は、古墳時代の基本的生産であり、少なくとも奈良時代までは、こうしたあり方をとっていたものであろう。平城京から出土する須恵器の多様性からみてもそれは窺える。もっとも、この貢納制生産は、律令制の根幹をなしており、理念としては、平安時代も当然、こうあるべきであるが、実際は、荘

園、私有地の増大によって、形骸化してしまうのである。

第Ⅱ期は、いわゆる弘仁瓷器の生産から始まる。弘仁瓷器に関しては、緑釉陶器、灰釉陶器の区別や、生産地が京内か尾張国であるかなど不明な点も多いが、いずれにしろ、この段階から、猿投窯製品が、全国各地に流通することは確かである。この流通が、律令制度の貢納とは考えられず、荘園間の流通あるいは奢侈品の地域的拡大とみる時、そこには商業的な活動が考えられるのである。他方で須恵器生産を残しながら、猿投窯が急激に灰釉陶器生産に傾むいていくのは、需要の増大があり、それは貢納の枠内ではなく、流通に支えられた、地方の富裕層の要求でもあった。このことは、『延喜式』民部下に記載された、いわゆる尾張瓷器が年料雑器として必要とされる数量が、きわめて少量であることから明らかである。

第Ⅲ期は、灰釉陶器が高級品としての地位を失い、雑器として大量生産化される段階である。これが極限に達したものが、山茶碗と呼ばれる無釉の碗・皿である。つまり、高級品としての灰釉陶器の流通は、貢納によるものではないとはいえ、一部の限られた富裕層の奢侈品として、贈答品あるいは下賜品としての性格が強く、一般商品としての流通は薄いものであったとおもわれるのである。それが、日常の生活用品として大量生産されるのは、明らかに商品の性格をもっているといえる。山茶碗は、基本的には、山茶碗と小皿という食器のセットであり、質的には決して良質なものではない。この食器のセットは、猿投窯以外の地域では、土師器であり、比較的小規模に生産されている。こうした、自給自足的な様相を残す土師質の碗・皿に比較して、山茶碗はより専門的であり、大規模に生産されている。また、山茶碗の分布からみて、その流通は、より広範囲に行われている。ただ、消耗品である食器は、流通コストからみて、それ程遠方へ運ぶことはできず、また、生産能力も不十分であったため、せいぜい、猿投窯地域の周辺に流通したに過ぎない。このところが、壺・甕類を中心とする中世窯業と異なる点である。

このように、猿投窯の生産における時間区分を、3段階に分けてみると、生産の担い手がやや明確となってくる。第Ⅰ期の貢納生産は、古墳時代以来の伝統を継ぐ部民生産であり、その主体は国・郡である。勿論、窯業生産は、特殊技能を必要とし、その立地も制約を受けるため、窯の経営者は、郡司クラスの地方豪族であったに違いない。しかし、我国最初の高火度施釉陶器である灰釉陶器の出現は、新たに、流通という側面を浮かびあがらせてきた。緑釉陶器が、基本的には官衙、大寺院といった中央権力と直結したところで使用されているのに対し、灰釉陶器は、もっと広い分布を示している。これは、緑釉陶器の生産・流通が、中央からの一元的なものであったのに対し、灰釉陶器の生産は、より多様性をもっており、流通も生産地から消費地へという、直接の交流が窺われる。こうした、生産と流通を同時に掌握することのできた勢力は、郡司クラスよりはるかに上級の勢力であった。この時代における窯業生産と荘園のあり方は、現在のところ明確ではないが、後代の渥美窯と伊勢神宮領の関係からみても、既に深い結びつきを持っていたと考えられるのである。猿投窯製品（特に灰釉陶器）の地方への展開は、荘園内の流通を軸として一層顕著になっていった。ところが、第Ⅲ期は、商品経済が進行し、流通が確立されてくる時代で、猿投窯製品は商品として生産される。それは、山茶碗の出土分布が、灰釉陶器と比較して著しく縮少し、生産地域の周辺に限られていることから明らかである。商品経済の原則として、当然その価格は、生産経費と流通経費の和以上に設定されるものであるが、消費者の経済に見合う必要がある。山茶碗が一般農民の日常食器である以上、あまり高い価格は設定できない。この

# 猿投山西南麓古窯跡群分布図



- (凡例)
- ▲ 5世紀～8世紀前半
  - 8世紀後半～11世紀
  - 12世紀～13世紀

ため、猿投窯は、単一品種の大量生産化や無釉化に進み、いわゆる山茶碗生産が始まるのである。

## 2. 生産の地域区分

猿投窯は、現在、①東山地区 ②岩崎地区 ③折戸地区 ④黒笹地区 ⑤鳴海地区 ⑥井ヶ谷地区の6地域に区分されている。これは、発生期の東山地区から次第に、東あるいは東南方向へ展開する窯跡群を、河谷等の自然地形によって分割したもので、生産の実態を反映したものではない。また、こうした地域へ窯業が展開することは、窯業の主体者（経営者）の意図的なものであって、陶工達の自由な立地選択の結果ではないことは明らかである。この主体者は、全期間を通して一貫したのではなく、時代によって変化している。

猿投窯のみならず、尾張全域を通して最初に須恵器生産が始まったのは、名古屋市東部の東山丘陵である。この段階における尾張の窯業生産地は、尾張旭市の城山古窯と春日井市の下原古窯の3ヶ所である。いずれも須恵質埴輪を生産していて、それぞれの地域における大豪族の経営によるものであることは明らかである。東山古窯は、尾張国最大の古墳である断夫山古墳と、下原古窯は、第2位の二子山古墳と深い関係を有し、城山古窯は前方後円墳の密集する守山古墳群の近くに位置している。ただ、城山古窯は、東山古窯が猿投窯へ、下原古窯が尾北窯へと発展していくのに対し、非常に短期間で終わってしまう。これは、城山古窯を経営する豪族が、つまりは守山古墳群を築造する豪族が、断夫山古墳に代表される豪族に吸収されたことを示している。一方、二子山古墳に代表される豪族は、その後も独自性を発揮し、尾北窯に継承される生産手段を温存していたのである。おそらく、前者は尾張連であり後者は丹羽県主と考えられるのではなかろうか。

東山古窯は、尾張氏の家内生産として須恵器生産を開始し、次第に生産を拡大し、城山古窯の生産をも吸収し一元化する。しかし、尾張国は、畿内政権に早くから従属しており、尾張氏の伸長は地方豪族としては限界に達していた。そのため、尾北窯の須恵器生産を一元化することはできなかったのであろう。

東山古窯で開始された須恵器生産が、大きく転換するのは、7世紀後半である。壬申の乱に大きな功績を残した尾張国には、地方豪族によって相次いで寺院が建立される。そうした中で、猿投窯の各地区に窯業が興るのである。おそらくこの段階では、尾張国は陶器貢納国にあげられ、新たな窯業生産が始まったのであろう。勿論、窯業の再編成は、猿投窯だけでなく、全国の須恵器生産地で行われたわけであるが、尾張国、美濃国、備前国等の須恵器貢納国では一層進んだ形で行われたに違いない。少なくとも猿投窯では、古窯跡が一気に増大するのである。この状況は、東山地区から良質な陶土を求めながら、少しずつ東へ進んできた様子を示していない。それは、尾張氏の持っていた生産手段をはるかに上まわる規模で行われたのである。当然、中央からも技術者が導入され、猿投窯の各地で開発が進められたものとおもわれる。その成果が、8世紀中頃から始まる灰釉陶器の生産である。

灰釉陶器は、植物灰の溶融する1200℃近い高温を必要とするため、耐火度の高い陶土を用いて生産される。これに適した陶土は、猿投山の山麓に近づく程豊富となる。しかし、実際に猿投山麓（つまりは瀬戸地区である）に窯業が興るのは、灰釉陶器の末期である。この理由は明らかではないが、瀬戸の陶土を直接に使用できるほどの技術を持っていなかったことが考えられる。

いずれにしろ灰釉陶器は、猿投窯地域のかなり広い範囲で始まるのである。しかし、灰釉陶器の性格が変化すると、生産の拠点地域が明確となってくる。

8世紀中頃から始まる灰釉陶器は、金属器写と呼ばれるもので、長頸瓶、水瓶、浄瓶等の特殊器形を中心としており、胎土も黒っぽく、一見して施釉陶器とは判断できないものがある。それにもかかわらず、灰釉陶器とする根拠として、粘土塊からの轆轤水挽き技法があげられている。この技法は、従来の須恵器生産にはみられない技法で、奈良時代前半の奈良三彩によって始まったものと考えられている。このことから猿投窯の再編にあたって、中央の技術が導入されたことを知ることができる。これに対して、9世紀に、磁器写と呼ばれる灰釉陶器が出現する。最近では、弘仁六年の「造瓷器生……………」に記載される、いわゆる「弘仁瓷器」をこれにあてる考え方が有力である。

この磁器写の陶器が、弘仁瓷器であるかどうかは別として、それが越州窯の青磁を模倣した陶器であることは間違いないところである。その特徴は、前段階の灰釉陶器が、浄瓶や水瓶などの容器を主体としていたのに対し、碗・皿等の食器があらわれることである。この磁器写の製品は、緑釉陶器で模したものは京都等の地域でも生産されていて、それが中央からの意志によるものであることを示している。猿投窯に関していえば、その産地は、2ヶ所に限定される。一つは、黒笹地区の黒笹14号窯周辺の地域であり、一つは鳴海地区の亀ヶ洞地域である。ただ、後者は、良質な緑釉陶器を生産し、全国に供給するが、短期間に衰退する。前者は、緑釉陶器の生産に関しては明らかになっていないが、灰釉陶器の技術を周辺に押し広げ、猿投窯の中核的な存在となった。猿投窯が、全国的な生産地としての技術、規模を誇るはこの段階といえる。

東山地区から始まり、三好町・豊田市まで東進した猿投窯は、11世紀の段階に再び東山地区を拠点とする。この時期は、律令制が崩壊し、院政が開始される時で、各地に富裕農民からなる武士団が勢力を得てきていた。こうした新興勢力を背景に、源氏や平氏が奈良時代以来の藤原氏の政権にとって代わろうとしていた。院政は、まさにこうした新興勢力と旧勢力のバランスによって保たれ政治権力であったともいえる。そして地方の経済力拡大を基盤に商業活動が非常に活発化していた。その頂点が、平氏による宋貿易である。この日宋貿易によって大量の中国製陶磁器が輸入され、猿投窯製品の地位は著しく低下していた。おそらく、『延喜式』に記載されている「尾張瓷器」の貢納も、その役目を終えていたに違いない。この段階に至って、窯業の中心が、再び東山地区に移ってくるのである。しかし、その製品は、かつてのような緑釉・灰釉といった施釉製品ではなく、無釉のいわゆる山茶碗と呼ばれる日常雑器であった。

東山地区が山茶碗生産の中心となるのは、山茶碗という製品の持つ意味から考えてみれば当然である。7世紀以降、ほとんど窯業生産を行わなかった東山地区に、再び窯の火が入れられるのは、11世紀後半である。しかも、経筒外容器や四耳壺という新しい器種を伴っていた。また、瓦も生産されている。このことは、山茶碗窯は、従来の灰釉陶器窯とは異なる生産構造をもっていたことを窺わせる。例えば、瓦は白河上皇や鳥羽上皇が盛んに造営した寺院や離宮の瓦として貢納されたのである。勿論、貢納したのは受領であり、荘園の管理者であった有力者であろう。しかし、瓦のような重量物で、しかも特別な技術を要しない産品は、従来であれば寺院の周辺で生産されるべきものである。それが大量に運搬されるのは、流通路が確保されていて、なお運搬コストが低くなければならない。これは、運搬手段が整備されてきたことを意味している。つまり、

商品の流通が盛んになってきたことといえる。山茶碗は、こうした状況の中で展開するのである。

### 3. 黒笹地区と鳴海地区の状況

黒笹地区の、特に黒笹14号窯周辺は、陰刻花文陶器を出土すること、精製された灰釉陶器を出土することなどから、中央工房（あるいは国衙工房）の存在したところと考えられる。また、鳴海地区の緑釉陶器窯の存在した亀ヶ洞にも、中央工房が存在したことは確かであろう。この両者が、尾張国の陶器生産においてどのような役割を担っていたかを考えてみよう。

鳴海地区は、愛智郡成海郷に比定される地域であることが確実である。ここは、赤塚古墳などの古墳があり、鳴海廃寺も存在しているように、古くからの生産基盤を有する地域である。また、尾張氏の本拠である熱田や支持基盤である知多郡とも接しており、しかも、東海道の要衝に位置している。この意味では、鳴海古窯は尾張氏と直結する生産地であるといえる。そのことは、この鳴海窯亀ヶ洞地区の緑釉陶器窯が、官窯の性格を有するものであるとしても、その中心となる経営者は、尾張氏である可能性が高い。この尾張氏こそ、東山地区において、尾張国で初めての須恵器窯を開窯した豪族で、一時期には、ほとんど尾張国全域を支配するほどの大勢力でもあった。しかし、律令制が進行する中で、その実質的支配権は次第に低下していく。特に、壬申の乱以降の地方豪族の再編は、古代豪族の尾張氏にとっては打撃であったに違いない。このことは、壬申の乱以後の地方勢力の象徴ともいえる、いわゆる白鳳寺院の建立をみれば明らかである。それはまた、元来、尾張氏の家内生産である、東山古窯の須恵器生産の相対的低下でもあった。つまり、この時期には、尾北窯が、尾張国の須恵器生産を代表する産地となっており、猿投窯は尾張氏の衰退と歩を合わせていた。たとえば、尾北窯では、白鳳期の瓦が生産され、国内各地の寺院に供給されているのに対し、猿投窯には白鳳期の瓦を生産した窯がみつからないのである。おそらく、こうした状況は、奈良時代まで続くのであろう。猿投窯の転換期は、施釉陶器の始まる時である。

鳴海地区における緑釉陶器の生産は、尾張氏の有する須恵器生産の技術の延長上にはあらわれてこない、革新的な技術である。一つは、釉薬の生産技術であり、一つは越州窯青磁の模倣技術である。これらの技術は、奈良三彩の技術からは容易に導き出されるものであり、原材料の入手をも含めて、中央の官工房に頼るべきものである。こうした技術が尾張国に移入されるとすれば、成海郷の地理的条件からみて、鳴海古窯が求められたのは当然ともいえる。成海郷の属する愛智郡こそは、尾張氏の本拠地であり、おそらく最後まで尾張氏の勢力が温存された地である。この緑釉陶器窯が中央官工房に属したものであったにせよ、実際の経営は、郡司ないしはそれに準ずる地方豪族によって行われたことは、想像に難くないところである。とすれば、尾張氏が、新しい技術を獲得したことに他ならないといえよう。ただ、鳴海古窯の緑釉陶器は、猿投窯全域に普及しなかった。これは、緑釉陶器生産がかなり厳密に規制されていたことと、釉薬原材料の入手が困難であったことを示している。しかし、この技術は、姿を変えて黒笹地区へ浸透していくのである。

猿投窯の黒笹地区が、律令期にどこの土地に属していたかは明らかでない。現在の行政区に従えば、愛知郡東郷町、西加茂郡三好町、豊田市にかけてであり、尾張国と三河国にまたがっている。しかし、精緻な陰刻花文陶器を生産した、黒笹14号、黒笹90号窯、黒笹89号窯などの存在す

る地域は、境川西岸の尾張国に属している。この地域は、律令期の愛智郡ないしは山田郡の地である。ただいずれであるにせよ、鳴海地区の緑釉陶器窯とは、7～8kmの距離である。この近縁性は、両者の陰刻花文の類似性にもよく表われている。

黒笹14号窯から89号窯の存在する地域は、陰刻花文陶を大量に生産していることで、他地域から突出している。それだけに、この地域が官工房的な性格をもったところと考えられるのである。しかし、鳴海地区と異なるのは、これまでのところ、緑釉陶器を出土していないことである。中央官衙、大寺院からの出土状況からみて、緑釉陶器が官工房生産の目的であるとすれば、黒笹地区は純然たる官工房ではあり得ないことになる。とすれば、黒笹地区の陰刻花文陶器生産は、どのような状況にあったのであろうか。

8世紀中頃から始まるとされる灰釉陶器生産は、黒笹地区にも広くいきわたっている。当然、農業生産が皆無の山中に、多数の窯業従事者が生活しているわけで、食糧の確保、製品の保管・運搬等、それらを円滑に機能させる組織が必要である。これは、おのおのの属する郡衙に置かれたとみるべきで、平城京から出土する猿投窯製品は、この組織を通じて生産、貢納されたものであろう。ここで問題となるのは、『日本後紀』に記載された弘仁六年の「造瓷器生、尾張国山田郡人三人人部乙磨呂等三人、……」の記事である。造瓷器生という名称から導き出されるのは、「造瓷器所」の存在である。瓷器が、施釉陶器を指す言葉であることは明らかであり、その一つに緑釉陶器があることも間違いないところである。このことから、鳴海古窯における緑釉陶器窯は、「造瓷器所」の一つであったことは確かである。また、造瓷器生である三人人部乙磨呂が、山田郡出身であることは、黒笹地域で窯業に従事していたことを窺わせるに充分である。つまり、三人人部乙磨呂等の伝習した造瓷器所が、畿内の官工房であれ、鳴海古窯であれ、灰釉陶器の陶工が、緑釉陶器の技術を習得し、猿投窯を発展させたことは間違いない。黒笹14号窯以下の存在する地域は、こうした、造瓷器所と尾張氏（あるいは愛智郡司）との合意に基いて運営されたものとおもわれる。つまり、造瓷器所の一つは、越州窯青磁の不足を補う目的をもって鳴海地区に開窯され、その生産に成功した。しかし、瓷器（緑釉陶器）の基本的要素は釉薬であり、それ以外の成型、素焼等は、造瓷器所以外で生産させることも可能であった。むしろ、こうした分業の方が経費的に低く押さえられたのであろう。あるいは、原材料に制約を受ける緑釉陶器に代って、従来から行われていた灰釉による越州窯青磁の模倣をめざしたのかもしれない。いずれにせよ、緑釉陶器の釉薬以外の技術は、陰刻花文の技法等を含めて、黒笹地区へ移入された。この地が、それまでの灰釉陶器生産において蓄積された最も良好な技術を有していたためであろう。また、鳴海古窯と近く、しかも境川を利用した製品の搬出にも適地であったからでもある。

この黒笹14号窯以下の経営者は、愛智郡を包括する地方豪族（愛智郡の郡司とそれに連なる尾張氏）であったと思われる。それは、鳴海地区の緑釉陶器生産が、平安時代前期の比較的短期間に消滅し、後継者を残さなかったことである。これは、この緑釉陶器生産が官工房である造瓷器所を主体として行われたため、中央の状況によって容易に打ち切られる存在であったことを示している。一方、黒笹地区の経営実体は、在地の豪族であり、その生産は律令制の崩壊の中で商業的な性格を強め、一層幅広く展開していくのである。当然、黒笹地区を含めた猿投窯全域が、時代の中で、荘園化され、分割所有される方向に進んでも、生産の実体が彼等のような在地豪族にある以上、生産は続けられるのである。

#### 4. おわりに

猿投窯は、あまりに多岐にわたるため、ややもすればその実体が空虚になることがある。しかし、現実に陶器を生産し、全国各地に流通させている以上、実体としての生産構造が語られなければならない。従来、猿投窯の研究は、その物が、いつ作られたかということに重きを置いて進められてきた。そして、そのことに関しては、全国各地の出土の増大、記年資料の増大などから、かなり詳細に論じられるようになってきた。しかし、だれが、どうして、なんのために、という生産の根本に関しては、あまり論議が進んでいない。勿論、文献がほとんど皆無に近く、これまで編年作業に追われていたということもあろうが、今後は、もう少しそうした方向の研究が進められることが望ましい。その一つの手がかりとして、小地域における窯跡の分布を詳細に検討する必要がある。一つの陶工集団が、同一地域に連続して窯を築くならば、その集団はどのような勢力によって生産を保証されているのか、ということをも明らかにしなければならない。こうした解明は、個々の小地域における発掘調査をまつ必要があるが、これまでの分布調査によっても概略は推し測かれるのではなかろうか。猿投窯研究の第2段階は、こうした方向にあるだろう。